

所蔵作品展

2026年度Ⅱ「言葉を観る、美術を読む」

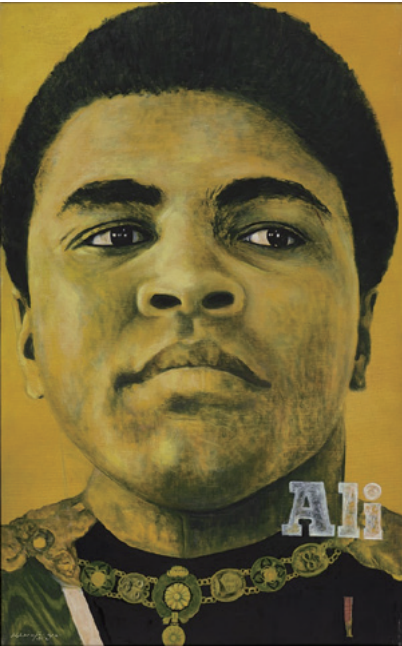
2026年7月11日〔土〕－9月30日〔水〕

※会期中展示替えを行います(前期:7月11日〔土〕－8月16日〔日〕、後期:8月18日〔火〕－9月30日〔水〕)。

展示室1 言葉を観る、美術を読む

私たちの生活の中で、「言葉」というものは非常に大きな役割を果たしています。ふと気にしてみると、私たちの身の回りには、普段私たちが認識している以上に、数え切れないほどの言葉があふれていることに気付くのではないのでしょうか。

では、「言葉と美術」と聞いてどのようなものを想像するでしょうか。例えば「本の表紙や挿絵」、「絵画の横の解説文」などでしょうか。これらは比較的イメージしやすい例ではありますが、言葉と美術の多様な関わり合いの中の、ほんの一部にすぎません。本展では、所蔵品の中から、言葉と美術の関係の幅広さ、



山下第二〈王者のわかれ〉1977年

奥深さが分かるような作品をご紹介します。言葉と美術の関係について見ていくことは同時に、言葉そのもの、美術そのものについても、いつもとは違った角度から考えてみるということにつながります。本展が、言葉や美術の、普段は見逃しがちな面白さや新たな一面に気付くきっかけとなれば幸いです。

展示室1 現代版画

絵をみて、そうぞうきこえる音は? 1  
7月11日〔土〕－8月2日〔日〕

絵をみて、そうぞうきこえる音は? 2  
8月4日〔火〕－9月6日〔日〕

絵をみて、そうぞうきこえる音は? 3  
9月8日〔火〕－9月30日〔水〕

展示室2 徳島ゆかりの美術  
同じ主題／変化する描き方

ひとつの作風を愚直に追求し続ける作家もいれば、多彩な表現を試みながら、自らのスタイルを更新する作家もいます。今回は、一人の作家が描いた同一テーマの作品を比較し、その表現の変遷を辿ってみましょう。

照明工事等のため  
2階美術館エリア休室

期間:2026年10月1日－  
2027年4月上旬まで

所蔵作品紹介

ヴァシリー・カンディンスキー

〈版画集〈響き〉5.叙情的〉

1911年 木版 紙 14.6×21.8cm

赤、青、黄という限られた色彩と、簡単な黒い線で構成された画面。ここには何が描かれているか、分かるでしょうか。この作品は、1913年出版の『響き』という詩画集の中の1枚です。『響き』は、38編の詩と56点の木版画から成る詩画集で、作者はヴァシリー・カンディンスキー（1866-1944）。具体的な対象を描くのではなく、色や形など、絵画の純粋な要素のみで表現する「抽象絵画」の先駆者とされる作家です。

カンディンスキーは1866年、モスクワに生まれました。大学では法律や経済学を学びますが、30歳を目前にして画家になることを決意。1896年にミュンヘンに出て美術を学びます。4年ほどの修行を経て、「ファランクス」や「ミュンヘン新芸術家協会」といった芸術グループを結成し、中心メンバーとして活動した後、1911年から、フランツ・マルクラと共に「青騎士」の活動を開始します。彼らは明確な形を持った芸術グループではありませんでしたが、雑誌『青騎士』の刊行や「青騎士」展の開催を通じて、同時代以降の美術に多大な影響を与えます。そして、カンディンスキーが抽象絵画を生み出すことになるのも、まさにこの頃でした。『響き』の刊行は1913年。そこに含まれる版画は、この時期の彼が、具象から抽象に至るまでの足跡を示すものもあります。

カンディンスキーがこの詩画集で目指した

のは、版画と詩、つまり美術と文学という異なる芸術分野を総合することでした。そのために彼は、詩では言葉の発音やリズム、版画では色彩や形態といった、純粋な要素が持つ力に着目しました。文学と美術というジャンルの枠を越えて、音やリズム、色彩、形態が共にその力を発揮することで、詩と版画とが総合され、詩画集全体が一つの「響き」を生み出すと考えたのです。この考えのもと制作された『響き』は、彼が抽象絵画に至るうえで、欠かせない作品だったといえるでしょう。

とはいえ『響き』では、彼はまだ完全な抽象に至ってはいません。この版画でも、右から左に向けて駆ける馬と、それに乗る騎手の姿が、簡単なながらも勢いが伝わるような表現で描かれているのが見て取れます。「青騎士」という言葉からも垣間見えるように、「騎士（騎手）」は、カンディンスキーが生涯好んで用いたモチーフでした。馬を駆る騎手の姿は彼にとって、それまでにない新しい表現を目指して進んで行く、自分自身を投影したものであったといえるでしょう。また「叙情的」という言葉は、文学や音楽でもよく用いられ、作品において作者の内面や感情がよく表れているさまを指します。この作品に描かれた、疾走する馬と騎手の姿からは、当時のカンディンスキーの決意が感じられるかのようです。

(学芸員 井手迫蒼)



歌川広重〈富士三十六景 東都両くく〉1858年4月〔前期展示〕

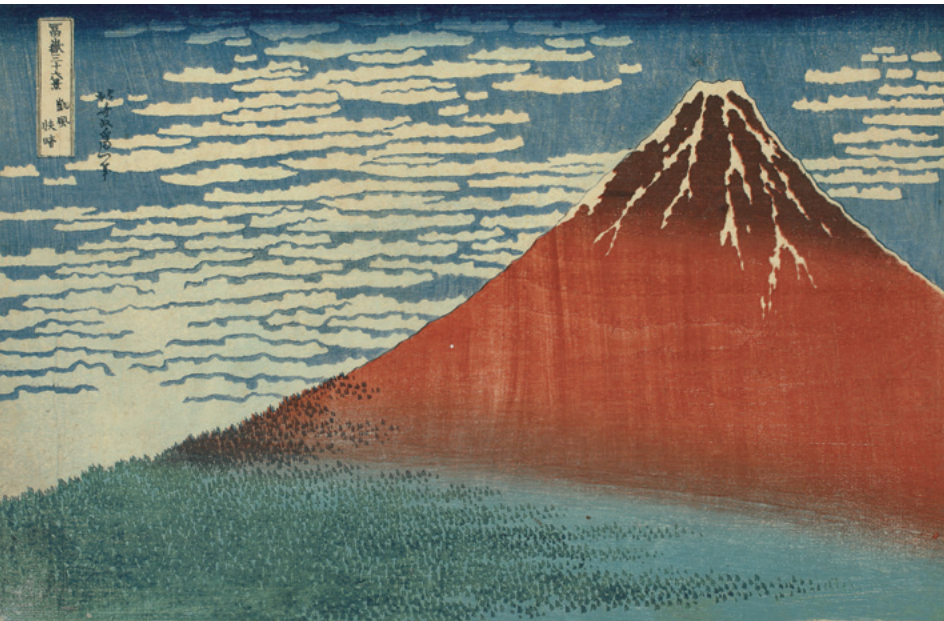
| 特 | 別 | 展 |

原安三郎コレクション

北斎×広重

2026年7月25日〔土〕－9月23日〔水・祝〕

前期:7月25日〔土〕－8月23日〔日〕、後期:8月25日〔火〕－9月23日〔水・祝〕



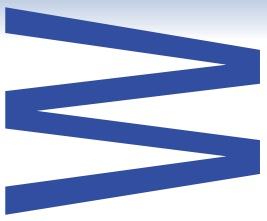
葛飾北斎〈富士三十六景 凱風快晴〉1830－33年頃〔前期展示〕

特別協賛:日本化薬 特別協力:中外産業 企画協力:毎日新聞社  
四国放送開局75周年プレ事業

\*作品はすべて中外産業株式会社原安三郎コレクション



徳島県立  
近代美術館ニュース



The Tokushima  
Modern Art Museum



138 July  
2026





## はじめに

徳島出身の実業家・原安三郎(1884-1982)が蒐集した浮世絵は、質・量ともに優れた個人コレクションとして高く評価されています。浮世絵の二大巨匠・葛飾北斎と歌川広重による名所絵の揃物(シリーズ)が丹念に集められており、江戸時代の鮮やかな色彩をよく残している点が特徴です。

本展では、初公開作品を含む200点以上の名品をご覧ください。代表的な浮世絵に加え、貴重な肉筆画や徳島出身の日本画家・公文蘆淵(くもん あしづみ)の絵巻なども展示します。展覧会構成の「第1章 北斎」、「第2章 広重」、「特集 原安三郎の慧眼(いっかん)」に沿って、特にご注目いただきたい作品や見どころをご紹介します。



公文蘆淵画、千葉胤明書〈更級日記絵巻 第十巻〉(部分)  
1941年4月【前期展示】

## 北斎の奇想

葛飾北斎(1760-1849)は、19歳から90歳に至るまでの約70年間、絵師として活躍しました。

代表作の一つ〈富嶽三十六景〉は70歳頃に制作されたもので、日本各地から望む富士の姿を、斬新な視点と機知に富んだ構図で捉えています。中でも「赤富士」として広く親しまれている〈富嶽三十六景 凱風快晴〉では、晴れ渡る空のもと、心地良い風に包まれながら、堂々とそびえ立つ富士が描かれています。タイトルに地名が含まれていないことから、富士そのもののイメージを象徴的に表した図と考えられます。山頂部が実際より鋭角に描かれることで、見



葛飾北斎〈百物語 お岩さん〉1831年頃【後期展示】

上げるような雄大さが強調されています。他にも、漁を主題に多彩な水の表現が展開される〈千絵の海〉や、怪談話をユーモラスに描いた〈百物語〉などを展示します。本展はこれらの貴重なシリーズをまとめて鑑賞できる、またとない機会です。北斎ならではの独創的な世界に触れてみてください。

## 広重の詩情

歌川広重(1797-1858)は、15歳で絵師の道を志して以降、生涯にわたり数多くの名所絵シリーズを手掛け、その第一人者となりました。

出世作として知られる〈東海道五拾三次之内〉(保永堂版)では、東海道の名所を季節・天候・時刻の違いによって描き分け、その土地に息づく風俗や人々の姿を情感豊かに表現しています。本シリーズの傑作と名高い〈東海道五拾三次之内 庄野 白雨〉では、突然の夕立に一齐に駆け出す人々が生き生きと描かれています。傘をすばめて踏ん張る姿や、駕籠を力強く握りしめる様子など細やかな人物描写



歌川広重〈東海道五拾三次之内 庄野 白雨〉1833-35年頃【後期展示】

からも、風雨の激しさが感じられます。さらに、雨と竹藪は墨で重層的に摺られ、周囲の景色がかき消されるような大気の様相が巧みに表現されています。また、雪・月・花を題材とした三部作の一つで、渦潮を花に見立てた〈阿波鳴門之風景〉や、藍や黄色、紫など鮮やかな色彩を用い、日常の中の富士山を描いた〈富士三十六景〉なども展示します。広重の味わい深い風景を心ゆくまでお楽しみください。

## 原安三郎の審美眼

原安三郎は、徳島藩の普請方を務めた家系に生まれ、父親は藍を扱っていました。3歳の頃に骨膜炎を患い、右腕と左足が不自由になりましたが、強い意志とたゆまぬ努力により自身の人生を切り開き、財界の重鎮として活躍しました。

原は大正初期、横浜からアメリカへ帰国する宣教師から譲り受けた浮世絵コレクションを母体に、浮世絵の蒐集を始めました。幼少期から藍が身近だったために、藍色が印象的な浮世絵の風景画に惹かれたのかもしれません。原のコレクションには、浮世絵師が一点一点直筆で描いた肉筆画も多く含まれています。江戸初期から近代に至るまで体系的に集められており、原の浮世絵に対する造詣の深さがうかがえます。本展では、北斎や広重の師を含む多様な肉筆画を展示します。

また、原の関心は浮世絵だけにとどまりません。大正末期、『更級日記』の綴じ間違いが明らかとなり、正しい順序が示されたことを受け、原はその絵画化を構想しました。同郷の住吉派画人の公文蘆淵に絵を、歌人で書家の千葉胤明(たねあき)に書を依頼し、全15巻に及ぶ絵巻を約10年の歳月を経て完成させました。精緻な描写と豪華な装飾からも、原の並々

ならぬ意気込みが伝わってきます。本作には、単なるコレクターを超えた、日本美術を広く深く敬愛する原の姿勢が表れていると言えるでしょう。



本展は、徳島で初となる大規模な浮世絵の展覧会であり、郷土の偉人・原安三郎が情熱と慧眼をもって集めた良質なコレクションを、徳島で展覧する機会となります。原が

愛した作品の魅力を存分にご堪能ください。なお、本展は前・後期ではほとんどの作品を展示替えいたします。会期中、複数回のご来場で全ての作品をご覧ください。

(主任学芸員 浅田真珠)

### 「原安三郎コレクション 北斎×広重」展 に関する催し

#### ギャラリートーク「北斎か広重か ふるさとを愛した原安三郎の審美眼」 7月25日[土]

①10時30分－11時30分、②13時－14時  
講師:小池満紀子(中外産業株式会社取締役美術品担当)  
近代美術館2階ロビー・展示室3 対象:どなたでも  
定員:30人程度(先着順、当日9時30分よりロビーにて整理券を配布) 要観覧券

#### はじめての浮世絵めぐり 8月2日[日]、8月30日[日]、9月19日[土] いずれも14時－14時30分

講師:浅田真珠(主任学芸員)  
近代美術館2階ロビー・展示室3 対象:どなたでも 申込不要 要観覧券

#### こども鑑賞クラブ+ 「タイムスリップうきよえツアー」 8月22日[土] 14時－14時45分

講師:近代美術館スタッフ  
近代美術館2階ロビー集合 対象:小学生(保護者同伴可)  
定員:30人程度(先着順、電話・メール申込) 無料(保護者は要観覧券)

#### 実演でみる浮世絵の摺り 8月29日[土] 14時－15時30分

講師:平井恭子氏(摺師)  
近代美術館3階アトリエ2 参加無料 定員30名程度(先着順・申込不要)

## Hokusai and Hiroshige: Works from the Hara Yasusaburo Collection

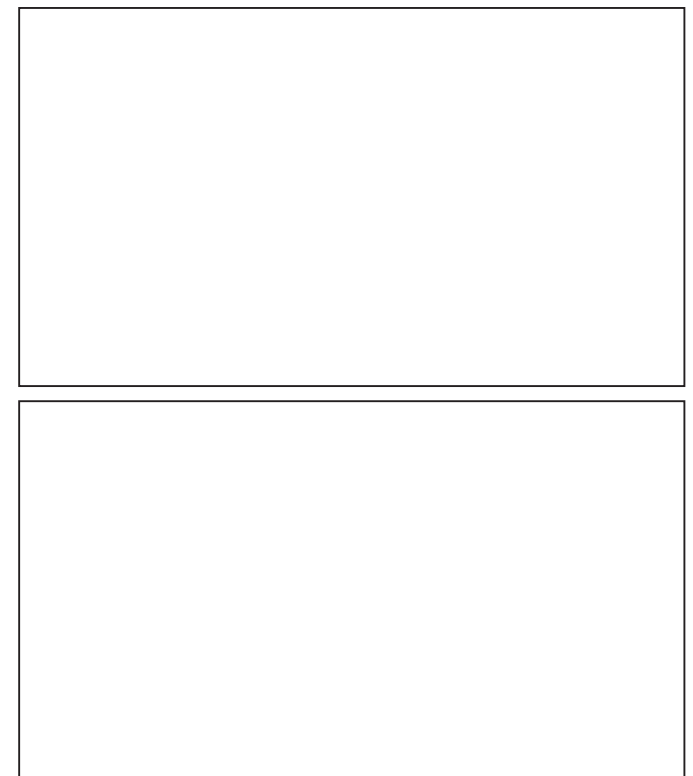


※最新情報は、展覧会特設サイトや美術館・四国放送のSNSでお知らせします。  
<https://www.jrt.co.jp/jrtweb/hokusaihiroshige/>

四国放送の野口七海アナウンサーが  
展覧会ナビゲーターに  
会場内に野口アナと学芸員による  
音声ガイドを設置。作品の魅力を楽しく、  
分かりやすくご紹介します。



同時期に徳島城博物館や万博との関連企画もあり  
徳島市立徳島城博物館で開催される企画展「公文蘆淵」においても、原氏のコレクションを特別公開。また文化の森では、大阪・関西万博の徳島ゾーンから移設した作品などを展示。



## 徳島県立近代美術館ニュース

第138号 2026年7月8日発行(7月号)

発行: 徳島県立近代美術館

770-8070 徳島市八万町向寺山 文化の森総合公園

TEL:088-668-1088 FAX:088-668-7198

イベント申込用メール

[ae@bunmori.tokushima.jp](mailto:ae@bunmori.tokushima.jp)

美術館や展覧会についての情報は

当館ホームページをご覧ください。

<https://art.bunmori.tokushima.jp/>

